

---

# 海のプラネタリウム

雪村マイカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海のプラネタリウム

### 【Nコード】

N3654R

### 【作者名】

雪村マイカ

### 【あらすじ】

届かない思いは、きっとこの世界にはないの。

「流星群が見られるのは、今夜が最後のチャンスになるでしょう。」

ラジオの天気予報がそう伝えた瞬間、あの星空はもう見納めか。と隣で仕事をしていた同僚が呟く。

この度地球にやって来てくれたらしい、半世紀に1度の大規模な流星群。

あいにく何の興味もなかった私は、パソコンの画面から目を離す事なく彼の言葉を聞いていた。

「愛沙<sup>あいさ</sup>さんは、流星群見た？」

「見てない。星にはあまり関心がないの。そういう啓君は、結構熱心なようね。」

「うん。昔から星を見るのが好きなんだ。」

彼は少年のように瞳を輝かせながら、なおも私に話してきた。

「星座や神話はさっぱりだけどさ、見てみると心が和む気がする。」

「じゃあ、私が海を好きな気持ちと同じなのね。」

「うん。て言うか愛沙さん、海好きだったんだ。」

「泳ぐのは嫌だけど、見るのは大好きなの。何時間でも見ていられるわ。」

「ふうん。」

西の空に落ちる太陽を背に、仕事だという事を忘れて互いの好きな物について語る。

彼は私の知らない世界を良く知っているので、話しているととても

楽しい。

「ねえ。」

「ん？」

「今から、海見に行こうよ。」

「…え？」

「今日は休日だから部長もいないし、何時に終わったって大丈夫な  
んだから。」

「…そうだね、行こっか。」

「よし、決まり！」

流れで突然海を見に行く事になってしまったが、別に構わない。

私には恋人もいないし、友人は土日仕事の子が多くて今日は遊んで  
くれないだろうから。

「乗って。」

「ありがと。」

彼の車の助手席に乗り込み、私達は海を目指して走り出した。

近くのパーキングに車を止めて、砂浜を歩く。

すっかり日が沈んでしまったおかげで少々肌寒いのが、横にいた彼が  
上着を貸してくれた。

「啓君、寒くないの？」

「俺は平気。」

「そう、なら良いんだけど。」

寄せては返す波を眺めていると、心が何かに包まれているような不思議な気分になる。

幼い頃、お母さんに抱っこしてもらって喜んでいた事を思い出した。ただそこにあつた温もりに甘えていれば良かったあの頃を。

人間はいつしかその温もりを忘れ、大人になる。

忘れたくなくても、すぐに何かに流されてしまう。

人間の記憶という物は、どうしてこんなにも悲しいんだろう。

そんな寂しさに涙が溢れそうになった瞬間、隣にいた彼が声を上げた。

「あ！」

「…！」

漆黒に染まる空に見えてきたのは、無数の流れゆく星と、それを引き立てる小さな星。

まるで天の川にでも来たような気分になる。

水面は星が放つ光が映し出されて、きらきらと輝いていた。

「…綺麗…。」

「見に来て良かっただろう？」

「うん。」

しばらく会話もないまま、黙って空を見ていた。

するとさっきまで真剣に星空を眺めていた彼が、真剣な表情でゆっくりと口を開く。

「今俺達が見てる星の光は、さ、何億年も前の光なんだって。」

「へえ…そう、なんだ。」

「たとえ光ったって届くかどうかも分からないのに、誰かに届くの  
を信じてずっとずっと光り続けていたんだろうな。」  
「……。」

それは知らなかった。

また一つ賢くなったな、なんて思っていると、彼が私の手を握って  
来た。

「ちょっと、啓く……。」

「でも、今こうして光は俺達に届いてる。」

「え？」

「届かない思いはないんだよって、教えてくれてるみたいだよな。」

突然の事に、頭がついていかない。

この人って、こんなに強引なタイプだったけ？

「だから、さ、愛沙さん。」

「な、何？」

「何か思っている事や抱えている物があるなら、どんどん言葉に出  
しなよ。」

「……！」

「言葉に出してれば、時間はかかるかもしれないけど、いつかは誰  
かに届くんだから。この星の光のように、ね。」

「啓君……。」

彼の名前を呼んだ時、右の頬が冷たい事に気付く。

今言われた言葉は、自分がずっと求めていた言葉だったのかも知れ  
ない。

その言葉と思いに伝えるように、彼の手をギュッと握り返した。

「少なくとも俺は、愛沙さんの思いなら全部受け止められるよ。」

私の心の空に、彼という名の星座が瞬く日はきつとすぐそこだろじ。

(後書き)

ただの思いつきです…。

海と星空を見るのが好きなので、  
それを題材にしてみました(・・)

でかいプラネタリウム行きたいなー…。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3654r/>

---

海のプラネタリウム

2011年4月3日14時19分発行